
Happy Birthday

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Happy Birthday

【ZPDF】

Z0384V

【作者名】

氷純

【あらすじ】

彼の笑顔は変わらない。

蠅燭の灯が微かに揺れる。

動いていない彼の影が揺らめいて、一瞬だけ私と触れ合った。

「Happy Birthday」

雰囲気を壊さないよう、静かなお祝い。

彼は何時も通りのはにかんだ笑顔を私に向いている。

電気を消したのは正解だつた。

蠅燭の暖かいけれど頼りない明かりが私達の境界線を朧氣にしてくれる。

「プレゼントはハンカチにしてみました」

用意しておいたハンカチを取り出すため、彼に背中を向けた私はかばんに手を伸ばす。

本当は彼が恥ずかしくて人前で使えない可愛い柄のハンカチで困らせてからにするつもりだつたけれど、予定を変更する。

この落ち着いた雰囲気をそんな悪ふざけで台無しにするのはもつたひない。

それに、どちらでも彼のはにかんだ笑顔は変わらないから。そんなことを考えて私はつい笑ってしまう。

付き合い始めた3年前はお互い高校生。今にして思えば馬鹿な事をよくしていたし、彼は人一倍いたずら好きで行動力もあった。付き合い始めたのも彼の行動力で積極的に迫られたからだ。

今の彼は随分と落ち着いたものだと思う。

プレゼントを取り出すのに手間取る私を急かさずに、彼はただ見つめるだけ。

まあ、これは当然か。

「はい、これ」

包装紙は私の趣味で可愛いものを選んだけれど、中身のハンカチはきっと気に入ってくれたはず。

彼は照れた笑顔を私に向けている。

さあ、次はケーキの準備をしよう。そういえば彼の好きなチーズケーキは売り切れで仕方無くショートケーキを買ったから伝えておこう。

「チーズケーキが売り切れでショートにしたの。ごめんね」
もしかすると彼の表情が変わるかと振り返る。私の期待を裏切つて彼は笑っていた。

ふと蠅燭が揺らめいて私の影が彼に触れる。

彼の笑顔に落ちた影は持ち直した蠅燭の明かりに追い払われた。
この蠅燭は本当にロマンチストで皮肉屋だ。
取り留めのない考えに私は笑いをかみ殺した。
今夜は彼と二人きり。

一晩中、私は彼の遺影に笑いかけるのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0384v/>

Happy Birthday

2011年10月9日10時31分発行